



#40

# 落し物には服がある?

著:藍澤たすく

イラスト:かもめ遊羽

学校からのいつもの帰り道、道端みちばたに白い手袋が落ちていた。それもなぜか片方だけだ。

「そう言えばどつかのラジオ番組で『なぜ道に落ちている軍手はいつも片方だけなのか?』つて特集やつてたなあ……」

片柳淳はそう呟きながら、その手袋を拾つた。

シルク製の上品な仕上がりだ。おそらく日焼け防止用の物だろう。

(結局ラジオではどんな結論が出たんだつたつけか……?)

思い出せないまま淳は落とした人が判りやすいように、近くの電信柱にそれをひっかけるとそのまま道を曲がつた。

「?」

今度はスカートが落ちていた。

それも自分が通っている高校の制服の……。

淳は説しげにその横を通過した。

さすがに今度は手にとるわけにはいかない。

「!」

次の角を曲がった瞬間、淳はまたもや固まつた。

今度は制服の上着と、ブラが落ちていたからだ。しかもブラの向こうには白いパンツ(スポ

ンという意味ではなく!)までもが落ちている……!(  
(これは……まさか……))

淳の頭の中でピンク色な妄想がスパークした。

まさか、ここでこれを順番に脱いでいくて……それで……。

そうだ、ない話じゃないぞ!

「まだ温かい……遠くへは行つてないはずだ……」

指でブラに触れた淳は、どこかの刑事ドラマで聞いたような台詞セリフを言うと、大急ぎで次の角を曲がつた。

果たしてそこに金裸ゼンラの女の子は…………いなかつた!  
代わりにそこにあつたのは……。

「うわ……」

淳は思わず声を洩らすと2、3歩よろけるように後ずさりした。

そう、彼の目の前に血塗れちまみの学生鞄がくせいかばんが落ちていたからだ。

おびだらしい血液を浴びたそれはあからさまに、ここで禍々しい凶行まがまがが行われたことを示唆しらせしていた。

「ど、どうしよう……」

淳は戸惑つた。

さきほどどのピンク色の妄想から一転、今度は灰色の犯行現場に突入だ。  
この時間の郊外の住宅街は人通りも少ない。

警察に通報するべきなのだろうか？

しかし実際に死体を見たわけでもないし、まだ確実に殺人事件と決まつたわけでは……。

「つ!?」

利那、後ろに嫌な気配を感じた淳はとっさにその場から飛び退いた。

間髪入れず、淳がいた場所に血塗れの包丁が突き立てられる。

少しでも避けるのが遅れていたら、確実に背後から心臓を抉られていたらどう。

「ひつ……」

淳の目の前には黒いフードをすっぽりかぶつた大男の姿があった。

口許しか見えない大男は何かをぶつぶつ呟きながら、淳の方にゆっくりと歩いてきた。

その異様な迫力に気圧され、淳は思わずその場に尻餅をついた。声を出そうにも恐怖で喉が

ひりついて何も出てこない。腰も抜けてしまつたようで、逃げ出そうにも立ち上がる事すら叶わない。

「コロス……コロス……コロス……」

大男は無機質な声で呪文のように繰り返している。

（死ぬ!? 僕、死んじゃうのか、こんなところで!? こんなことで!?）

恐怖に目を見開く淳。しかしやはり体は動かない。背中を冷たい汗が伝つていくのが判る。

やがて男はゆっくりと包丁を振りかざして……。

「カアーネット！」

突然大きな声が周囲に響いた。

「いやー、良かつたよ！ 今の恐怖の表情！ 最高だつたね！」

向かいの角からニコニコ笑顔のポニーテール女子高生がやつてきた。淳と同じ学校の制服を着ている。

手にはメガホンを持ち、小脇には何やら台本のような物を挟んでいた。

「？ ？ ？」

状況が把握出来ず大量のクエスチョンマークを浮かべる淳。

「あははは。あたしホーランネマ研究部部長の阿佐ヶ谷飛鳥つて言うんだけど。今、自主制作映画を撮つてて、君はそのエキストラになつたつてわけ」

「？ ？ ？」

そう言われてもとても理解が追いつかない。

やがてどこに隠れていたのか、大きなビデオカメラを担いだ女子2人、さらに大きなガンマ イクをもつた男子1人がわらわらと路上に出てきた。

みんな一樣にいい笑顔である。

「最初に落ちたスカートを見た時の鼻の下をのばした表情からのギャップが良かつたわよね！」

「うん、あの恐怖が張り付いた表情は最高だったよ！」

「俺の殺人鬼の演技も迫真だつただろ？ な？ な？」

口々に勝手な感想を述べながらホラーシネマ研究部（学校では「ホラ死ね団」と呼ばれていることを、その時淳は思い出した）の面々が談笑している。先ほどまで血塗れの包丁を持つていた大男もその輪に加わっている。当然ながら彼も「ホラ死ね団」の一員のようだ。

「えっと、確か片柳くん？ だつたつけ？ 良かつたらテイク2行つてみない？ さつきのも良かつたんだけどさ、もつと恐怖に怯える感じを強調して出してほしいんだよね」

ニコニコ笑顔でそう言ってくる飛鳥。

そんな彼女たちの姿を見て、淳はだんだん腹が立ってきた。こんなドッキリみたいな感じで騙され、しかも怖い思いをさせられて……。しかもそれをもう1回やつてくれときたもんだ！

「冗談じゃないですよ！ 人をバカにするにもほどがあります！ 僕はもう帰らせてもらいます！」

「まあまあまあ、そう言わずに！ これはキミにしかできない演技なんだよ！」

憤然として帰ろうとする淳を飛鳥が引き留める。

「はあ？」

「僕にしか、つて単にドッキリにひっかけただけじゃないですか！」

「いやいやいや、キミにしかできないんだよ、恐怖に怯える人間の表情は！」

そこまで言うと飛鳥はいたずらっ子のような笑みを浮かべた。

「なんせ、あたしらゾンビだからね」

「はあ？」

飛鳥の意味不明発言に怪訝な表情を浮かべる淳。

……どうも自分は関わり合いになるべきではない、頭のネジが2、3本はずれた人達に遭遇してしまったようだ。

「意味がわかりません！ とにかく僕はもう帰らせてもらいます！」

「まあまあまあ、そう言わずに！」

「いい加減もうしつこいですよ！」

怒った淳は引き留めようとする飛鳥の腕を乱暴に振り払う。

その瞬間。

ボトリ。

飛鳥の右腕が地面に落ちた。

それはもう肩口から、見事に。

ざつくりと。

あまりの展開に淳は言葉を失い、路上に落ちた腕と、片腕になってしまった飛鳥を交互に見比べた。そしてその目が徐々に恐怖で見開かれていく。「ほらあー、だから言つたじゃん。あたらゾンビなんだからさー、もつと丁寧に扱つてくれないと。なんせ腐つてんだからさー」

腕がとれたというのに、まったく意に介さない様子でそれを拾う飛鳥。

そして拾つた右腕をにこやかに淳に突きつける。

「じゃ、ティク2やつてくれるかな?」

「ぎやああああああああーー!? とれた!? 腕がとれたああああーー!?!」

淳は絶叫してその場にへたり込んだ。

なんだ!? 一体何が起こってるんだ!? 僕は今いつたい何を見てるんだ!? これは現実か、夢か!? 悪い夢なら早く覚めしてくれ！ お願いだー!!

「はい、カアーネット！」

飛鳥の元気良い声が響いた。

「いやー、最高だったよティク2！ 人類の恐怖の集大成みたいな怯えっぷり！ やつぱキミ才能あるよ、片柳くん！」

「言うが早いか、飛鳥の右腕がによつきりと生えてきた。  
「は？」

「あ、これ？ 特殊メイクってやつだよ。すごいだろ、まったく本物にしか見えないだろ？」  
ぽかんと放心する淳に、飛鳥は得意気に胸を張る。

「ほらこっちにも生首とか生足とかあるよーん♪ 血塗れで素敵でしょー♪」  
血塗れの生首数本と生足数本を抱えてにつこりと笑う飛鳥。  
なかなかシユールな絵面である。

「は、ははは……」

淳はもう恐怖を通り越して変な笑いが出始めていた。

しかしそうしてが作り物だつたという事が判ると、また徐々に落ち着きと怒りが復活し始めた。  
「……これ、まさかその自主制作映画に使うわけじゃないですよね?」  
カメラを指さし、淳は静かな怒りを湛えた目でそう訊いた。

「え？ 別論使うよーん。だって最高の演技だつたじゃん？」

「演技じゃありません！ ただのドッキリじゃないですか!? 僕は絶対こんな認めませんから！」

「使わせませんからね！」

「え、そんなつれないこと言わないでよー、淳くーん♪」  
「なれなれしく触らないでください！」

淳がぱしつと飛鳥の手を振り払う。さすがに今度は腕が落ちることはない。  
しかしそこで飛鳥の表情にさつと陰が差した。

「……夢だつたんだよ」

「え？」

「この自主制作映画を作つて全日本ホーラーシネマコンテストに出ることが、今は亡き先代部長の夢だつたんだよ！だから、だから、お願ひだよく片柳くうくん！」

「そんな安っぽい泣き落としにひつかかるとでも思つてるんですか!? とにかく！ 今撮影したデータは絶対破棄してもらいますからね！ カメラの人！ こつちに来てください！」

「ちえつ（……）」

飛鳥があからざまに残念そうな顔になる。

「……まあ、しようがないかあ。じゃ、岬、カメラ持つてきて〜」

「はい……部長……」

飛鳥に指示されたお団子結びの女子が、渋々と言つた表情でカメラを淳に差し出した。

早速淳はカメラのプレビューを表示すると、自分が映つているシーンを次々に削除していく

た。しかしそれにしても我ながらひどい顔だ……。

「あ～あ、もつたいない……」

飛鳥が嘆息混じりに天を仰いだ。

「は？」

瞬間、飛鳥が怪訝そうな表情を浮かべる。

「だから！ そつちのカメラにも僕、撮影されてるんでしょう？! さつさと来てください！」

「カメラは1台だけだよ？」  
 「え？」  
 「は？」

飛鳥の応えに、今度は淳が怪訝そうな表情を浮かべる。

「当たり前じゃん。このカメラ1台いくらすると思つてんのよ。うちの部の予算じゃ1台あるだけでもありがたいってもんでしょう？」  
 「だつて、あそこにほら、カメラ構えた女の人が……」  
 「ふふふ、ありがとう。おかげでいい画えが撮れたわ。これでももう思い残す事は何もない」

突然、淳の頭の中に直接響くような声がした。と、同時にカメラを構えた女子の姿がすーっと消えてなくなつた。

「……あ、あはははは、ひ、ひつかかりませんよ？」  
「これも特撮なんでしょう？」  
SFXなん

淳がひきつった笑顔で飛鳥に問いかけるが、彼女たちは本当に何が起こっているか判らない様子でお互い小首を傾げながら顔を見合せている。

その時飛鳥のボケットからひらりと1枚の写真が舞い落ちた。

「日向……部長……？」

「ほら、さつき言つた今は亡き先代部長だよ。去年撮影中の事故で亡くなつちやつたから、こうして撮影の時は写真で同行してもらつてるんだ」

にこやかに写真を見せる飛鳥。

「う、うわああああ～～～～!! ああああああ～～～～!!」  
そしてそこに映っていたのは、間違いなく先ほど音もなく消えていったカメラ女子だった。

淳はこの日一番いい恐怖の表情で、大絶叫したのだつた。

おしまい